

國學院大學學術情報リポジトリ

〔講演録〕 ブラジルにおける日本語教育の諸問題

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ジョウコウ, アリセ・タミエ, 久野, マリ子, Joko, Alice Tamie, Kuno, Mariko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000369

〔講演録〕

ブラジルにおける日本語教育の諸問題

◆平成二十八年十二月二十二日

◆渋谷キャンパス一三〇周年記念五号館五三〇二教室

◆講師 アリセ・タミエ・ジョウコウ (Alice T. Joko)

◆担当 久野マリ子

平成二十八年度國學院大學大学院國際學術交流事業の短期招聘研究員として、平成二十八年十一月二十八日（月）から平成

二十九年一月十三日（水）まで、ブラジル連邦共和国ブラジリア大学（UNB）文学部・外国語・翻訳学科日本語日本文学専攻准教授アリセ・タミエ・ジョウコウ（Alice T. Joko）博士を招聘した。ジョウコウ博士は国立ブラジリア大学の日本語日本文学科の主任教授として、また、ブラジルにおける日本語・日

本語教育の指導者としてブラジリア日本語普及及協会創立会員として日伯國際交流にも貢献しておられる。

研究テーマは一貫して話し言葉に関する研究で、日本語とポルトガル語のポライトネスの対照研究、日本語・ポルトガル語の音韻体系の対照分析などがある。今回の招聘の目的は、多言語国家ブラジルにおける日本語の位置づけに関する研究である。日系移民によって世界で最も日本語が継承されている国ブ

ラジルでの日本語教育の現状、とりわけ博士が研究しておられる日本語とポルトガル語との言語接触によって日系人の間に生まれる様々な中間言語や、ブラジルにおける日本語の保持・継承の意義、日本語教育の問題を通して広くグローバル化する世界での第二言語習得についてのあり方を視野に入れた社会言語学的な議論を深めることが目的である。

日本とブラジルにおける、かつての日系移民と現在のブラジル出稼ぎ移民の子弟における母語教育の問題や言語政策のあり方について、共同研究を進めることができた。招聘期間中では、大学院の論文指導演習（久野担当）の講座で、ブラジルの高等教育機関における日本語教育や、ポルトガル語と日本語の言語接触と中間言語に関する対照研究についてゼミナールを四回開催した。

それとは別に、平成二十八年十二月二十二日（木）文学部講演会で講演をお願いした。「ブラジルにおける日本語教育の諸問題」と題する講演会は、広く一般聴衆にもアピールするテーマで学外からの参加者も多く、講演終了後も質問の列がどれほどの盛況であった。本公演では、ブラジルの大学制度と教育制度の違いや多民族国家の中での第二言語習得の問題、日系移民の抱える日本語の問題を例に、大学院生や学生に国際的視野

を持つ研究や国際学術交流の重要性を実感させ、新たな世界を広く紹介して頂くこととなったことは大きな成果であるといえる。

なお、ジョウコウ博士は平成二十九年四月二十九日付け発令による春の外国人叙勲で、「ブラジルにおける日系人社会の地位向上及び日本ブラジル間学術交流及び日本文化普及に寄与」した功績により、旭日小綬章を授与された。（久野マリ子）

【講演】

ブラジルにおける日本語教育の諸問題

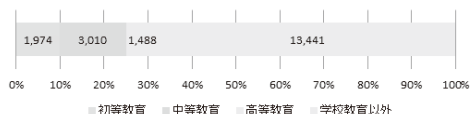
アリセ・タミエ・ジョウコウ

今日のテーマは「ブラジルにおける日本語教育の諸問題」となっていますが、結論から申し上げますと、ブラジルにおける日本語教育はその多様性ゆえにかなり複雑な問題を抱えているということができないのではないかと私は個人的に解釈しております。私が直接関わっているのは高等教育における外国語としての日本語教育で、ポルトガル語では**licenciatura**と呼ばれる日本語教師の資格を取るための教職課程です。学校教育の科目

ブラジルにおける日本語教育の現状 (2012)

機関数	教師数	学習者数				
		初等教育	中等教育	高等教育	学校教育以外	合計
325	1,132	1,974	3,010	1,488	13,441	19,913
		9.9%	15.1%	7.5%	67.5%	100%

2012年度日本語教育機関調査結果 学習者数グラフ出典 国際交流基金 2014



ではない言語の教師を養成するわけでありますから、現地の日本語教育事情を把握していいないと、現場のニーズに応えうる人材を社会に送り出すことはできないと考えております。

それでは、まず現在ブラジルにどのぐらいの日本語学習者がいるかと申しますと、国際交流基金が三年ごとに行っている調査では、ご覧のように約二万人と

なっております。

これを、世界規模で見えますと、世界の日本語学習者の数は、国際交流基金の調査結果では二〇一五年現在で三六万五千人となっております。一三七か国のうち上位十位のマレーシアが三万三千人ですので、ブラジルはまあ上位二十位の中に入っているのではないのでしょうか。

そこでまた前のデータに戻りますが、ブラジルで行われている日本語教育の約七十%が学校教育以外となっております。ご存知のようにブラジルは約一五〇万人にも及ぶと言われる、世界で最も多い日系人の人口を有していますが、実はそれがブラジルならではの日本語教育の特殊性に直接関わっていると考えられます。それで、まず大学の日本語教育の例として、私が所属しておりますブラジリア大学についてお話ししたあとで、この学校教育以外の日本語教育について触れてみたいと思っております。

一、大学で行われている日本語教育

大学で行われている日本語教育でまず挙げられるのは日本語専攻コースです。これは日本語・日本文学研究を目的とするサ

ブラジル民族構成

国・地域名	ブラジル連邦共和国（Federative Republic of Brazil）
面積	851.2万km ²
人口	約2億40万人（2014年）（ブラジル地理統計院推定）
首都	ブラジリア
民族	欧州系（約48%）、アフリカ系（約8%）、東洋系（約1.1%）、混血（約43%）、先住民（約0.4%）（2010年）（ブラジル地理統計院）
言語	ポルトガル語
宗教	カトリック約65%、プロテスタント約22%、無宗教8%（2010年）（ブラジル地理統計院）
政治体制	連邦共和制（大統領制）
議会	二院制（上院81名、下院513名）

出典 外務省「各国・地域情勢 ブラジル 基礎データ（2016年）」

ンパウロ大学の専攻コース（一九六二年設立）から始まって、二十世紀に五校、今世紀になつてさらに三校の公立総合大学に現在設けられていま

でも入れますと、二十校以上にのぼるといふ調査結果が国際交流基金から報告されています。加えて、今年から国際交流基金が日本留学を目指す理工系の大学生を対象に、すでに日本語教育を行っている五つの連邦大学に新しい日本語講座を設置したため、高等教育機関における日本語学習者数はさらに増加しています。

では、どのような機関で、どのような教師によつて、どのような教育が行われているか、またそこにどのような問題があるのかをブラジリア大学を例にご紹介したいと思います。その前にブラジルの教育制度や教育事情について少しご紹介します。

南アメリカ大陸の大半を占めるブラジルは日本の二・五倍の面積を有していて、大きく北と南に分けられます。北は赤道が通過していて、熱帯気候であり、南は亜熱帯で冬は雪が降る州もあります。ちなみにオリンピックでお馴染みのリオ州はケッペンの気候区分では熱帯のサバンナ気候で、一年を通じて最低気温は平均十八度以上となっております。

ブラジルの住民は、先住民のインディオ、最初に開拓したポルトガル人、さらに十六世紀後半から奴隷としてアフリカから強制的に連れてこられた黒人、十九世紀の奴隷解放後はそれに

変わる労働力としてドイツやイタリアからの移民、二十世紀のはじめからは日本移民などによって形成されています。人種のるつぼといわれる所以ですが、その割合がグラフに出ています。

それぞれの文化が互いに混じり合って同化し、結果として一つの独特な共通文化を現在もなお形成中の文化多元主義社会です。国語はポルトガル語ですが、地方によっては今でもドイツ語、日本語やイタリア語が話されているところもあります。しかし、それぞれ、かなり現地語が混入していて、本国とは違ったバラエティを生じ、日系コミュニティの場合、話している日本語はコロニア語と呼ばれています。ブラジルでは日系人全体の集団は日系コミュニティではなく、日系コロニアと呼ばれています。

次に教育についてですが、義務教育は九年制で日本の小学校と中学校に相当します。高校への進学率は九十%以上ですが、中退が多く、また卒業しても公立校は教育のレベルが低いので機能的非識字率がかなり多いといわれています。その結果、無料の公立の大学へ進学できるのはほとんど私立の高校出身者で、九十年代前半までは低所得で昼間仕事をしなければならぬ者は夜間の有料の私立大学へ通うという矛盾が起こっていました。そこで、教育省は九十年代後半に連邦大学の夜間コース

を拡大し、格差社会問題を教育によってすこしでも改良しようという対策を行いました。その時対象となったのは主に教職課程で、これにはブラジルは教師という仕事につきたいという人が少ないので、教師不足を補うという目的もあったわけです。

ブラジリア大学は、これを機に夜間コースを大幅に拡大して、外国語ではそれまで選択外国語であったスペイン語と日本語を教職課程として導入しました。さて、ここで、日本語は学校教育の科目に入っていないのに、どうして教職課程なのかという疑問が生じるかと思われしますが、その答えは学校教育における外国語の位置づけにあります。

初等教育基礎課程Ⅰのカリキュラムは、公立学校の場合、ポルトガル語、算数（基礎Ⅱでは数学）、自然科学、歴史と地理、芸術、体育、横断的テーマと倫理、環境と健康、文化多様性と性教育で、外国語教育は基礎課程Ⅱ、つまり六年生で導入されますが、これは現代外国語とだけ指定されていて各学校が自由に選べることになっています。そして中等教育でさらにもう一つ外国語を導入することになっているのですが、これは二〇一〇年からメルコスール（日本語では南米南部共同市場または南米共同市場と訳されている南アメリカ諸国の関税同盟のことなのですが）との関連からスペイン語と決められています。

最初の外国語はどこでも当たり前のように英語を選んでいるわけですが、基本法によりますと、ほかの言語でもかまわないわけです。そうしますと、一応、それに備えておく必要があります。そこで、大学では教職課程に日本語も可ということになりました。また、需要と供給という観点から、日本語教職課程が公立大学以外では行われていないのも説明がつきます。

実際問題として、二〇一〇年にスペイン語が高校の必修となったときは、必要な数の教師が国内で確保できず、政府は様々な応急措置をとらなければならなかったという例があります。

さて、これからブラジル大学のご紹介に移りますが、お目にかかるスライド四枚は毎年二回入試結果の発表が行われる祭に必ず見かけられる光景です。



ブラジル大学入試結果の発表

出典：ブラジル大学公式サイト（<http://www.unb.br/>）より引用

総合大学195中のブラジリア大学



195の総合大学中9位 (2016年)

出典：フォーリャ デ サンパウロ (Folha de São Paulo)

ご覧いただければお分かりになるように、ブラジリア大学に合格するということはこのように受験生にとっては本当に重要なできごとなのです。それは連邦区唯一の総合大学ということだけではなく、ブラジリア大学の国内での位置づけが関連しています。次の図はフォーリャ デ サンパウロ (Folha de São Paulo) という大手新聞社が毎年行っている全国の総合大学の評価ですが、ブラジリア大学は三年連続で上位十位の中に入っています。

では、もう少し大学の全体像を見ていきましょう。大学の第一キャンパスはブラジリア市の北側にあり、一部は湖に面しています。体育学部のカヤックの授業はこの湖で行われます。学生・教職

員、コースは四つのキャンパスを合わせたものです。

日本語専攻は文学部の外国語・翻訳学科に属しています。翻訳には英語、フランス語、スペイン語があります。学科には応用言語学と翻訳の二つの修士課程があります。大学院では言語学と応用言語学で日本語の研究もできます。

日本語部門には専任教師が十名いますが、その内訳は日本の大学を出て、ブラジルで修士と博士の学位取得者が二名、日系二世二名、準二世と呼ばれる、日本で生まれてブラジルで教育を受けた者が一名、非日系ブラジル人四名、イタリア人一名で、この構成にはブラジル社会の多様性が反映されているのではないのでしょうか。

次のスライド（省略）は、今年九月に行われた日本語コース主催の講演会のときの写真です。日本大使館の文化担当書記官やブラジリア日本語普及協会の理事長、先生方の姿もみえます。ブラジリアは日系人口が多くないので、ご覧のように日本語学習者はほとんど非日系人です。ブラジルでは、日系人以外のブラジル人を非日系人とよんでいます。

日本語が専攻コースとなったのは一九九七年ですが、それ以前にも一九八一年から公開講座や選択外国語コースとして活動していました。日本語部門は二〇一一年に設立三十周年の記念

行事として日本語・日本文化の本の出版を企画して、現在までに六冊出版されています。特に好評なのは今年出版された基礎日本語の文法書で、年内にすでに二版目が出版されました。

次にカリキュラムをご紹介します。日本語部門が行う科目だけではなく、言語学入門、文学論入門、教育学、教育心理学などが必修となっていて、他に自由選択科目などがあります。

ブラジルは国語がポルトガル語ということもあって、外国語を勉強する習慣が伝統的にもとからありました。それに今の若い人たちは生まれたときから日本のアニメやゲームに親しんでいて、日本語に対する違和感を持っていません。学生にとって、英語はできて当たり前というのが前提です。もう一つの他の言語をといたとき、抵抗無く日本語を選んでいるようです。さらにブラジリア大学の事情として、入試に際して教職課程と学士課程の差が分らないので、日本語だけを勉強すればいいのだと思って入ってくる新入生もかなりいます。そういうことで、日本語コースを選んだ動機は実利的な目的より、日本についての知識に対する興味の方が上回っています。結果として、現実に直面して、すぐに挫折する者と中途で待遇表現や授受表現などの学習についていけなくなつてやめていく者など様々でして、卒業する頃には学習者は半分以下になっているというのが

ブラジリア大日本語専攻コースカリキュラム

カリキュラム(日本語関連)

学年	必修科目			選択科目	
	日本語 1 (60H)	実践日本語 1 (60H)		日本文化 1	
1°	日本語 2	実践日本語 2		日本文化 2	
2°	日本語 3	実践日本語 3	現代日本社会		
3°	日本語 4	実践日本語 4			
4°	日本語 5	日本文学 1		口頭表現1	ライティング1
5°	日本語 6	日本文学 2	日本語教授法	口頭表現2	ライティング2
6°	日本語 7	日本文学 3		口頭表現3	ライティング3
7°	実習 1			口頭表現4	ライティング4
8°	実習 2	日本語ラボラトリー			

必修科目 (他の部門)

コード	教科名	学部・学科名
140082	言語学入門	文学部 言語学科
141089	文学理論入門	文学部 文学理論学科
124966	発育と学習の基礎	心理学部 学校発達心理学科
192015	基礎教育	教育学部 方法・技術学科
194221	ブラジル教育組織	教育学部 計画・管理学科
191027	教育心理学	教育学部 理論・基礎学科

現状です。

もちろん、学習者がやめていく背景には日本語習得の難しさだけでなく、卒業してからの就職先の問題なども忘れてはな

日本語コース学業中退の背景

- ▷日本語習得の難しさー漢字ができないと参考書が読めない等
- ▷卒業してからの就職先の問題
- ▷自助努力の結果が出ないため、モチベーションの低下
- ▷言語能力中心の教授法ー日本語でコミュニケーションができない
- ▷教材・教具の問題ー古臭い、魅力がない
- ▷その他

りません。現行のカリキュラム及び教授法では優秀な学生でも卒業までに到達できるのは日本語能力試験でいえばN2レベルであり、平均的な学習者はそれ以下、すなわちN3レベルで学業を終えてしまいます。N3レベル程度では、日本語を生かした仕事につくのははじめから無理であり、また自立学習も満足にできない状態です。で、学習者のモチベーションの低下につながります。

この現状を改善するには、大学側は学生の自助努力だけに頼らず、効果的な日本語教授法へとパラダイムシフトをする必要があります。その新パラダイム構築にあたっては、まず大学が社会に送り出す日本語教師に求められている知識や能力を把握することが必要

となります。外国語を学習する意味はその言語を話す人たちとの人間関係を構築することであるなら、現在行われている教授法に取って代わるもの、つまりポスト・コミュニケーションアプローチを確立することが教育界の課題だと思われます。まず考えられるのは

- ・ 言語能力…音声と意味と文法の知識
- ・ 社会言語能力…場面によって言葉を適切に使い分けることができる能力。時、場面、相手によって常体と敬体を使い分けたり、その言語コミュニティのバラエティを用いて、メンバーであることを強調するなど。

・ 社会文化能力…仕事、交流、社会生活などのインターアクションのための能力。言語は予め特定の意味を持つコードではなく、話し手が聞き手に情報を伝達するための手段でもない。言葉の意味はインターアクションによつて決まる。しかし何がその場で適切かということは文化によつて異なることがあるため、日本人と日本語でインターアクションする時は、日本の文化の知識がなければならぬ。

以上の三能力であり、この総合がインターアクション能力であると考えられます。現在行われている、構造主義に基づいた

言語能力偏重の教授法が改善を迫られていることは学習修了時の結果に裏付けられています。

ブラジルにおける外国語習得の観点というアプローチからみた日本語研究はほとんど未開地の分野であるといえます。ポルトガル語を母語とする学習者にとって日本語を習得するとはどのようなことなのか、習得のメカニズムを探索するには言葉に關するさまざまなデータを取って、それを分析していかなければならなりません。日本語専攻の大学が増えている現在、研究者同士のネットワークを強化して研究結果を共有し、日本語学習に応用することが今後の課題となっています。

二、初等・中等教育

初等・中等レベルの公機関での日本語教育は主としてサンパウロ州、パラナ州、ブラジルア連邦区の教育局が運営する言語センターで課外活動として行われています。国際交流基金が行った調査では二〇一四年現在、ブラジル全体で三十数校あるということです。一九八九年にサンパウロ州、パラナ州の州立学校の言語センターで日本語教育が開始され、二〇一一年にはブラジリアの公立学校の外国語センターにも日本語コースが試

験的に設けられました。ブラジリアの場合、最初は四校、今は五校で教師は六名、生徒数は六〇〇名を超えています。試験期間の良い結果に鑑み、二〇一七年には正式に三名の教師の採用試験が行われますが、予備としてさらに十名が選考されることになっているので、現在の五校の教師増員とともに、現在日本語が選択肢となっていない残り六つの語学学校にも今後導入される見通しは高いと思われます。採用試験を受けるには大学の日本語教職課程の免状が必要で、卒業生にとっては生涯雇用の連邦区公務員となる大きなチャンスです。

公立外国語課外講座以外にも国際交流基金のデータでは公立・私立合わせて約三十校の初等・中等教育機関で日本語教育が行われているということです。今、注目を浴びているのが今年度からアマゾナス州の首都マナウスの州立中学校で行われている日本語・ポルトガル語のバイリンガル教育で、テレビなどでも紹介されています。この学校はブラジルでも珍しい全日制で生徒数は約千人、プログラムはアマゾナス連邦大学、日本領事館、現地の日系団体連合会等に支援されているとのこと。他に類を見ない画期的な計画で、波及効果が期待されます。

私立の場合は、就学前の段階から「基礎課程1、2」までの十年近く日本語教育を行う学校が、全国に十数校存在しますが、

その多くはもとは移民のための学校であったところが、日系子弟離れに伴い、バイリンガル校として再スタートした場合が多いようです。日本語は選択科目もしくは課外活動という位置づけで、語学だけではなく、太鼓や柔道なども行われていることがホームページで紹介されています。情操教育の一環としての、外国語としての日本語指導（日本語を通しての異文化との接触）で学内の日系人・非日系人分け隔てなく、日本文化を伝えることを目的としています。幼稚園児に対しては、知識・言葉を体で身につけることを重要視し、小学校以降では文法を取り入れた体系的な日本語指導をするため、日本語教育の資格を持つている教師を採用しているようです。

いずれの学校でも、「基礎課程2」の九年生まで日本語を継続して学習できますが、大学入試を控えた中等課程まで続ける学校はほとんどないというのが現状のようです。ブラジルの大学入試の外国語は特に指定されない限り（例えばフランス語専攻にはフランス語のみ）、英語・スペイン語・フランス語の中から受験生が入試申し込みの時に自由に選ぶことができるようになっていきます。

では、これから学校外教育とそのブラジルならではの特殊性についてお話させていただきます。

三、学校外日本語教育

学校教育以外の機関としましては、日系団体が経営する日本語学校、民間の外国語学校、大学における公開講座などがあります。民間の語学教室や大学の公開講座の学習者は二十〜三十代の学生や社会人が多いのですが、日系団体経営の日本語学校の対象は主に日系の児童・生徒です。これは土曜日しか開講しないところが多く、生徒数も少ないのが特徴です。外国語として日本語を教えているサンパウロ市にある日伯文化連盟アリアンサとブラジル全土に展開する公文式日本語教室は一〇〇〇〜三〇〇〇人規模の学習者を擁しています。なお、大学の有料公開講座でも一〇〇人以上の学習者がいるところもあります。

日系社会内の日本語学校では、継承語としての日本語教育を行っているところもあり、ブラジル日本語センターという非営利の日系団体が支援を行っています。お手元の日本語センター会報にもありますように、ブラジル日本語センターの主な活動には次のようなものがあります。

- ・ JICA日系研修「継承日本語教育」コースに参加する研修員の来日前通信講座

- ・ 現地における JICA 助成金支援による日本語教師合同研修
- ・ 日本語能力試験の実施
- ・ お話大会、作文コンクールなど、学習者を対象としたプログラム
- ・ 有料の日本語教師養成講座(六ヶ月間)
- ・ 全伯日本語教師合同研修会
- ・ 汎米日本語教師合同研修会
- ・ 日系団体運営の日本語学校の特殊性としましては、次のようなことが言えるのではないかと思われます。
 - ・ 特に資格が問われず、日本語が話せれば教師になれるところが多い。
 - ・ そのため一世の教師や結婚等によってブラジルに永住したネイティブの教師が多い。
 - ・ 就労で日本へ行った親に伴って来日し、日本で中学校や高校を卒業して帰国した日系人教師もいる。
 - ・ 日系社会内のネットワークを形成しているが日系社会を超えた連携はほとんどない。
 - ・ 土曜日だけの授業が多いので、複式、超複式方の授業を行っているところが多い。

神戸からサントスの港までにかかる日数

第 1 回移民の笠戸丸 (1908年)	52日
備後丸 (1928年)	63日
アルゼンチナ丸等の高速船 (1930年代末)	34日
ブエノスアイレス丸、リオデアネイロ丸	46日

よく知られていることですが、ブラジルにおける日本の教育は日本人のブラジル移住と同時に国語教育として始まりました。移民政策として家族で移住するのが原則でしたので、当然そこには学校教育を受ける年齢の子供もいたわけです。その子供たちは出身母村の小学校から、渡航中は洋上の小学校で勉強して、それからブラジルの日系教育機関で国語教育を受けたという記録が残されています。洋上小学校の出現には日本からブラジルまで一番長い航路で六十三日、高速船でも三十四日かかったという渡航の事情がありました。

日本移民がブラジル社会に適応していく過程が顕著に現れているのが「日主伯従主義」と「伯主日従主義」という表現ではないでしょうか。それは寺

子屋的性格を持った日本語習得や修身教育を目的とする日本学校と移住を出稼ぎと考えていた初期移民から長期定住化に意識が変化していく過程とも捉えられます。日本語を国語としながらも、ブラジル教育の否定はせず、むしろ生活一般には困らない程度のポルトガル語力は身につけてほしいという考え方から、ブラジル式教育を中心に据え、日本語教育は補習とし、日本の良心・規範を備えた良きブラジル国民を育てようとする心構えへのチェンジを意味しています。一部の移住者が成功して財力を蓄えたにもかかわらず、帰国を断念して永住を考え始めるにあたっては様々な社会的要因が考えられますが、外国移民同化策としてヴァルガス政権が行った一九三八年から一九四八年までの外国語教授制限法、そして第二次世界大戦での祖国の敗北などの影響は大きかったものと考えられます。ナシヨナリズム政策によって戦前に閉鎖された日本学校は約五〇〇校と推定されていますが、一九六〇年代には約六〇〇校の日本語学校の存在が記録されています。ブラジルの日本語教育の理念については当時の知識人アンドウ・ゼンパチ氏の『二世とニッポン語問題―コロナの良識にうったえる』（一九五八）に著されています。

ニッポン語教育の根本目的は、二世とは何か、また、コロナにとつてはどうあるべきか、ということが、はつきりときめられていないと、正しくつかまれない。（中略）一世と二世とのつながりを密接にして、その協力を完全にするために、何よりも必要なのはコトバである。しかもそのコトバは一世のもつすぐれた才能、技術、また一世の母国ニッポンのいい文化を二世を通じてブラジルに伝えるために、ニッポン語でなければならぬ。このように考える時、二世の立場はたんに、よいブラジル人であるというだけではすまされないものがある。二世はブラジルを母国とする立派なブラジレイロであるとともに、一世の気持ちを理解し、ニッポンの文化に深い関心をもつニッポン人の子どもであることによって、二世という特殊な立場が、かがやかしい社会的存在となるのである。（アンドウ・ゼンパチ『二世とニッポン語問題―コロナの良識にうったえる』一九五八）

しかし、その後の日本の経済復興により国の政策としての移住は打ち切れ、日系社会を取り巻く環境も変化していきます。世代交代に伴う使用言語としての日本語の消失、日系人による

継承日本語教育の衰退などもその一環だといえるでしょう。一九七〇年代に入り、JICAと国際交流基金による日本語教育の専門家派遣、ブラジル側の日本語教師の日本研修などの制度が整うにつれ、日本語教育は外国語として、または文化継承ではなく文化普及のための手段として求められるようになっていくのです。二〇一二年の時点で、日系人は全体でおおよそ一六〇万人、そのうち三世は約六割、四世は八割ほどが混血であらうと推測されています。

日本語学校の問題点はこの現実から向き合っていないことから起こっていることが多いと思われませんが、その例をいくつか挙げてみたいと思います。

まず継承語の定義ですが、日本語学校の学習者は三世、四世が多く、生活言語はほぼ全員がポルトガル語です。継承語の定義を生活言語が日本語であり、学習言語が現地語とするのであれば、言語形成期からすでに現地語を母語とする日系子弟の日本語教育を継承語と呼ぶには無理があるのではないでしょうか。

次に保護者の日本語保持に対する価値付けの程度に対する認識の問題があります。すなわち、英語教室になら高い月謝を払うが、日本語は月謝が上がると親がやめさせてしまうという現象です。これは日本語を継承することに対する意識の低さにか

かわっていて、保護者はわずかな月謝を払って一応日本語学校に行かせることによって自分の責任を果たしたと考えていることにほかなりません。

また、学校側が考えなければならないことの一つに、教師の問題があります。

(ヘリテージ教育では) 語学力があるという意味で一世教師が適任者であると思われがちであるが、実際は現地校で育つ子供たちと心情的にも、行動パターンにおいても、また価値観においてもずれがあり、そのために授業がうまく行かない場合が多い(佐々木 二〇〇一)

以上見てきたように日本人が移住者としてブラジルに定住した時点では、家庭内でのコミュニケーションの手段として、日本語は生活語でした。加えて、コーヒー園などの労働力として雇われていたころは、周りの現地人はカポクロと呼ばれるほとんど読み書きのできない非識字者であったため、日本語を教えなければ自分たちの子供もカポクロといわれる下層の無知な田舎者になってしまうという懸念がありました。しかし、時代が代わり、日本語学校の生徒は三世・四世で、ほとんどが高学歴

の親を持ち、都会暮らしをしています。このような現実では、ブラジルの日本語教育に継承語としての教育理念を持たせることは難しいと思われます。

日系人が子供に日本語を学ばせるのは、日本人というルーツを忘れないで、誇りを持つてほしいと願う気持ちからだと思われます。そうであるなら、継承語ではなく、継承文化教育の中で日本語も学習するというのがより親の思いにかなっているのではないのでしょうか。親は日本語は別に必要不可欠の言語ではないので、楽しんで覚えることで、日本が嫌いにならなければいいと思っていますのかもしれませんが。

継承文化教育としての日本語はどうあるべきかということ現場で実践している教師と協力し合ってプログラムを開発することもブラジルの日本語教育研究の課題の一つではないかと私は考えております。長い間、ご清聴ありがとうございました。

【主要参考文献】

毛利健人「ブラジル日本語教育の現状と課題」認定NPO法人NGOブラジル人労働者支援センターホームページ（最終閲覧日：二〇一六年十二月一日）
佐々木倫子（二〇〇三）「3代で消えないJLHとは？」日系移民の日本語

継承「母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究
中島和子（二〇〇五）カナダの継承語教育―多文化・多言語主義をめざして 明石書店

濱田国佑（二〇〇五）在日ブラジル人の定住化とその意識 北海道大学大学院教育学研究科紀要、97、225-239.